



渡辺 大直

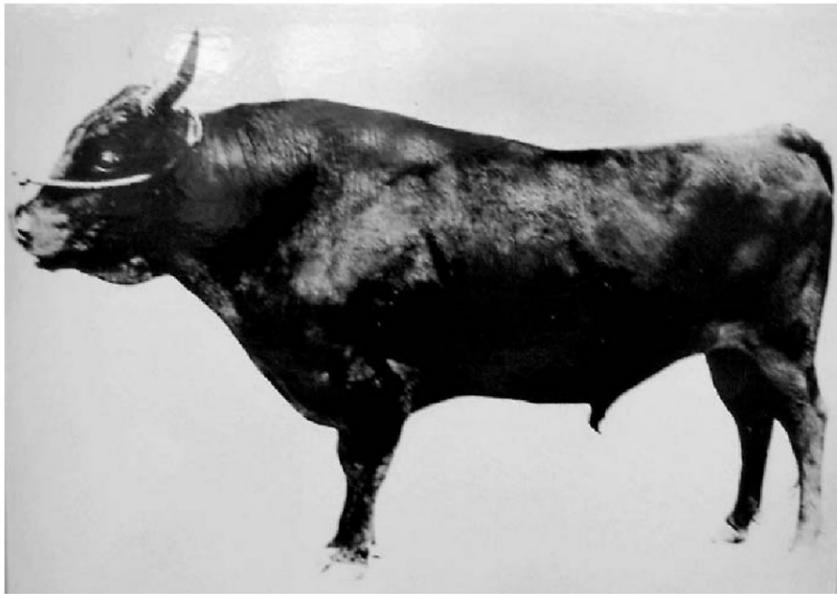
明けましておめでとございませう。本年もどうぞよろしくお願ひします。

但馬牛博物館は1994年に但馬牧場公園の施設として開館した。以来、開館当時のエース種雄牛谷福土井の剥製や但馬各地にある但馬牛の碑の拓本を加えたが、展示物は開館当時のまま変わっていない。造り付けの大型展示が大部分で、更新できず、20年余りが過ぎてしまった。

来館者の皆さんは、「いつ来ても同じ」という印象しか持たれなかっただろう。そしてなにより、現在の但馬牛に関する展示が無い。「但馬牛は昔から優れている、それを守っているのではないのか?」と思われるかも

しれないが、但馬牛も肉用牛という現役の家畜だ。変化する時代のニーズに適応し、農家や食肉事業者に経済的効果をもたらさなければ消えてしまわざるを得ない。この20年の間にはそんな危機もあったが、それを乗り越えて今の但馬牛に至っている。同じようなことは博物館そのものにも言える。長い歴史と伝統に加え、今なお進化を続けている但馬牛の足跡を記録し、新たな展示として情報発信することは博物館の仕事だ。

リニューアルで“知りたいニーズ”対応



黒毛和牛のほとんど全てに遺伝子を伝えているといわれる「田尻」

像だ。

田尻は現在の黒毛和牛のほとんど全てにその遺伝子を伝えているといわれるゴッドファーザーだが、この像に映し出す映像は、いくつかのテーマの中から来館者が「知りたいニーズ」に合わせて選択できる。

この他にも「牛」のつく漢字遊びや但馬ビーフパズルなど、子供たちが遊びながら牛に親しめるプレレコーナをつくることにした。そして展示物を入れ替えしやすくし、但馬牛の歴史や改良の足跡などの展示には、絵や写真を使いわかりやすくする工夫をしている。

4月の開館、乞うご期待。

■筆者プロフィール■
 わたなべ・ひろなお
 1954年、新温泉町浜坂出身。県職員として畜産行政に長年携わってきた。県立但馬牧場公園「但馬牛博物館」館長。

技術に興味を持つ方もあり、来館される方の「知りたいニーズ」はさまざまだ。しかし造り付けの固定展示だけではこつした「知りたいニーズ」に対応できない。今回、但馬牛博物館をリニ

ューアルすることになって、他の博物館をはじめいろいろな人からアドバイスをいただいた。新しい博物館の目玉として期待するのは、展示室の中央に置く田尻の像に映し出すプロジェクトマップング映